小樽商科大学学術成果コレクション
Otaru University of Commerce
Academic Collections
Barrel

Title	札幌商科大学創設期の前後 -中野徹三氏に聞く (3)-
Author(s)	今西, 一
Citation	商学討究 (2012), 62(4): 1-29
Issue Date	2012-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10252/4803
Rights	

This document is downloaded at: 2013-02-19T22:17:21Z

Barrel - Otaru University of Commerce Academic Collections

札幌商科大学創設期の前後

― 中野徹三氏に聞く (3) ―

今　西　　一

1　札幌短期大学への就職

今西「前回は60年安保闘争まで話していただきました」

中野「そうでしたね」

今西「今日は1960年代から，先生が共産党から除名される84年ぐらいで行きたいと思うんですけれども，63年にはもう，今の札幌学院大学の方へ移られた，当時は短大の方へ行かれたんですよね」

中野「いや，63年には札幌短期大学に就職したんです。その時にはこの学園には短大しかなかった」

今西「では63年４月は，札幌短期大学の専任講師になられたんですね」

中野「そうです」

今西「科目は何を担当されていたんですか」

中野「社会思想史という科目と歴史，それからドイツ語と三科目でしたが，昼と夜があるんで，結構忙しい。札幌短大っていうのは，恐らく短期大学では日本でここだけと思いますが，70年代のはじめまで，外国語は英語のほかに独仏のいずれかの，二カ国語を必修にしていたんですよ，夜間部も含めてね。それで僕の前の年にここの専任になった八木橋貢君という哲学の友人が，中野は社会思想史も歴史もできる，それにドイツ語もやれるから，採用して損がない，といって短大の教授会でがんばってくれて，お蔭でここの専任になれたのです。僕が短大で人一倍頑張れたのは，ひとつには孔明の出師の表じゃありませんが，誰も普通は助けないこれほどの公然党員の僕を引っ張ってくれたこの恩に『応うるに馳駆を以てす』の思いがあったから，だと思います」

今西「1965年はいわゆる，日韓闘争ですね」

中野「うーんまあ，そうですね」

今西「日韓条約の頃は，何か運動をされてたんですか」

中野「いや，ほとんどしてないですね，私も札幌短大に入るまで，こういう学校があることすら知らなかった。それくらいひっそりと生きていた短大で，60年安保の時も学生運動らしい動きもなかったようです。前身の札幌文科専門学院は，終戦の翌年の46年に創立されたんですが，自分の校地も校舎もなく，中島公園の池の側にあった農業館という雨漏りする古い建物を借りて，授業をしていたんです。まだ札幌に私立の大学がない時代ですが，この文専は昼間部と社会人相手の夜間部を持ち，経済科，法科，文科の三科構成で発足したんですが，復員学生も多く，向学心に富む優秀な学生が集まってユニークな学校だったらしい。男女共学も実施しました」

今西「男女比はどれ位だったんですか,男性の方が圧倒的に多かったんですか」

中野「もちろん男性が多かったんですが，戦後で意欲的な女性も結構いたようです。男女共学は，北海道ではここが初めてだと聞いています」

今西「その頃はまだ女性は女子大の時代ですからね」

中野「最初はまだ各種学校で，卒業してもなんの資格もない，それで学生たちは文専を札幌文科大学にする運動を起こしたんですが，さしあたりこの文専は『札幌短期大学』となって1950年に認可を受けました。この頃までは，北大にはじめて文系学部（法文学部，1947年）が出来たあとで，北大や小樽商大の先生たちが沢山教えに来ていて，カリキュラムはなかなか充実してたんですよ。あの伊藤整さんや国文学の風巻景次郎さん，小樽商大の仏文学の松尾正路さんなども，教壇に立っていました」

今西「どういう方が創立者なんですか」

中野「創立者は小林傭佶さんといって，小樽商大の前身の小樽高商を出て，それから東京商大に進んで，召集されて軍務に就いて，復員してから，大学時代の友人と語り合って，文化国家としてこれから日本が生きるためには，是非大学とそこでの民主主義に基づく教育が必要だ，という使命感から，文専の創立

を決意し，多くの人の協力を得て実現した，というようです。小林さんはその後日交ハイヤー始めいろいろな企業を興し，ユニークな本道の経済人として活躍し，商大を開設するためにも大きな役割を果たしてくれました」

2　札幌短期大学の発展

今西「先生が専任になって給料はどれくらいだったんですか」

中野「僕が入った時の初任給は確か２万４，５千円ぐらいでしたかね，それでもそれまでは昼間夜間の高校の非常勤が20時間近くと家庭教師を合わせてもやっと１万３，４千円でしたから，感激してね，早速給料袋を親父の家の仏壇に上げて，じいちゃんとばあちゃんの霊に，『長い間心配かけました』と報告しました。」

今西「奥さんとは結婚されていたんですか」

中野「結婚したのは短大に勤める２年前の61年で，それで今年はちょうど満50周年なんです。彼女は北大農学部の研究室の職員になってたんですが，僕は大学院のオーバードクターで，定職に就いていないんで，７つ年下の妻の扶養家族になりました。こういうケースの，多分草分けだと思いますが。子供が三人生まれてとうとう退職してからも，大学作りから大学経営，党活動と党内闘争，そして本来の仕事である研究教育活動と，途方もなく忙しい僕とずいぶんと苦労をともにしながら，支えてくれました。」

今西「奥さんのお名前は，なんとおっしゃいますか」

中野「元の姓は平賀っていいます。戦艦陸奥などを設計したあの平賀譲の平賀，名は拝啓の啓を書いてひろこと読みます」

今西「短大にはお友達とか，やっぱり共産党の組織はあったんですか」

中野「組織はなかった。私の前には，小樽商大を出て名大の大学院に行って，水田洋さんのところで経済学史を研究した，たいへん勉強家の鈴木亮さんという人がひとりぽつんといて，僕が移籍して２人になって，ふたりで相談しながら活動を始めたんです。彼は僕と違って冷静なリアリストの一面を持ち，いろいろ教えられました。その時の専任教員は，全部でたった９人でした」

今西「でも，面白いですね，戦後の北海道で，そういう勤労者教育をやろうという意欲で私立学校を設立した人がいたというのは，非常に興味深いですね」

中野「そうですね，でも私が入った時には労働組合もないし，老人夫婦がやっていた小さな売店と食堂だけでもちろん生協もない，学生の学友会といくつかのクラブはあるけど，北大の学生運動のようなものもない。資産としては55年にやっと取得した3,300平方メートル強の校地に古い木造2階建てを建て増した2,800平方メートルの校舎と図書室だけ。でも理事には今井デパートの今井道雄さんとか北海道のハイヤー業界の草分け的存在の北交ハイヤーの柴野安三郎さんとか，そうそうたる顔ぶれはいるが，短大にはほとんど関心がなくて，理事会にもほとんど出て来ない。主力銀行は拓銀（北海道拓殖銀行）でしたが，そこからは定年者が理事長になって座っているだけ。しかしこの前後から第一次ベビーブームの世代が押し寄せはじめて，全国的に私立大学ラッシュが始まっていまして，短大の理事者も札幌短大を四年制大学にすることを，考えていたんです」

今西「それで動いてたんですか，68年前後がいわゆる私学の創設ブームですね」

中野「そうそう」

今西「ちょうど，だから学園闘争のきっかけにもなるわけですよね。大学は学生数急増しますからね，校舎も足りない。教室も足りない，講義室にも入れないって状態で，あちこちの大学で紛争の火種が生まれます」

中野「その頃ですか，入学されたのは」

今西「68年です，1968年に入学しました」

中野「ああ，ちょうどうちの札幌商大が出来た年だ」

今西「先生が，常務理事としてやられた頃くらいが，私の入学の年です」

天野「京都もわりとその頃ボコボコできたわけですか」

今西「そうそう，龍谷大学では経営学部，法学部なんかを新設されています。文学部は江戸時代からある僧侶の学校からの伝統を引き継いでいます」

中野「その私大ブームのお蔭で32歳でやっと就職できて，今度は50分1コマの昼夜合わせて週8コマ，7時間のノルマであとは家に帰ってもいい，もう北大

安保共闘の共産党代表幹事の仕事も細胞委員会もおさらば，班会議も高校のアルバイトもない，それで何もしなくたって，何もしないんじゃないけど，給与は倍。それに手当もある。ワイフの扶養家族の身分からも解放。やあ大学の専任教員ってのはいいもんだな，と最初の１年は往復の路すがらしみじみと幸福を噛みしめました(笑)。これはもう，マルクスのいう『真の自由の国』だと(笑)。そのお蔭であとで大学づくりや常務理事の恐ろしい繁忙がやって来ても，たいして苦しいとは感じなかった。皆さんにいいますが，やはり苦労は，若いうちにした方がいいですよ（笑)」

今西「同感ですね。それだけは，先生が共産党から貰った恩恵ですね（笑)」

3　希望学園への吸収の危機

中野「本題にもどりますが，しかし，当時の本学の理事会が考えていた大学開設のプランが，とてつもなく杜撰で非民主的なものだったことは，すぐはっきりしました。私が勤めて間もなくの63年７月頃，理事会がつくった『札幌商科大学設置準備委員会』の金巻賢字委員長（小樽商大教授）と越山専務理事とが，短大の土屋学長にも教授会にも諮ることなく『商大の専任教員予定者』を決めて，依頼状を発送していた事実が判明しました。短大を母胎として設立するというのに，私学ではこんな大学自治の蹂躙がありうるのか，とまずびっくりしました。早速緊急教授会を要求して，理事長と専務理事の出席を求めて皆で追及すると，専務理事と委員長は辞任し，短大の教員全員が入る新しい準備委員会が出来ました。それで今度は自分たちで理事会の計画を検討してみると，その杜撰さが次々と浮かび上がった。この年の春から，短大の校舎の一部を壊して鉄筋コンクリート５階・地下１階の校舎の建設が始まり，秋にはその躯体工事が終わりましたが，短大の3,300平方メートルの校地に校舎を建てても，四年制大学の設置基準には全く適合しない。入学定員200名の商科大学を開設するには，その10倍近くの約30,000平方メートルの校地と5,000平方メートルの校舎を，申請時に所有していなければならないんです。だからこの新校舎は，今の短大の校舎としてしか，活用できない。しかもこの校舎は，躯体工事で中

断されてしまい，短大は取り壊された旧校舎の分だけ狭くなって，授業にも支障を生ずるようになったんです。どうして工事が止まったかと理事長に聞くと，未払い分が3,600万円あるんで，それが決済されないと内装工事はしてもらえない，という。でも，この工事を請け負っているのは，短大の一番古い理事の地崎組ですから，これしきの未払いで工事ストップっていうのはおかしいし，また理事長が送り込まれている拓銀が融資しないのも納得できない。それで僕らは，何者かの黒い意図が動いている，と感じたわけです」

中野「それで僕らは，今後に予想される不測の事態にも対処できる体制づくりを，教職員と学生に呼びかけて急ぐことにしました。その一つは教職員組合を結成することで，これは翌64年の4月に全員で結成しました。20数人の小さい組合ですが，同時に北海道の私学教祖に加盟。もう一つは，北大で生協運動の経験を持つ僕が中心になって，一部と二部（夜間部）の学生に呼びかけて，それぞれ10数名ぐらいの準備委員会を発足させ，その精力的な活動で64年の年末に札幌短期大学生活協同組合が誕生しました。これは，あとでわかったんですが，日本で最初の短期大学生協だったんです。これが契機になって学生との連帯も進み，新校舎の即時完成と四年制昇格の早急な実現とは，短大の教職員と学生の共同の二大スローガンになっていきました」

今西「当時は，全学協議会という発想が生まれてきていましたから」

中野「まあ，大きな意味ではそういっていい，と思います。65年になっても，新校舎の内装は依然としてストップしたままなので，教授会と学友会は，拓銀からの3,000万の融資の実現に協力してほしい旨，学園の全理事に署名で要請しました。すると拓銀は，全理事の保証という条件付きでなら，融資に応ずる，という意向を内示したんですが，でもそれは，ただ1名の理事（これは今井理事ですが）が，他人の借金の保証はまかりならぬ，という家憲があるから，という理由で保証を拒否したため，実行不能となりました。すると11月に開かれた短大の理事会は，もう短大単独で融資獲得の見込みはない，という理由で，突如札幌第一高校を経営している希望学園との合併を決議したんです。実はわれわれはこの問題について，この年の夏頃から非公式の打診を受けていたので

すが，我々は教授会との事前の協議なしに合併などを決して決議しないよう理事長に強く申し入れ，その約束を得ていたのでした。当時の第一高校は，再三の一方的な学費値上げで父兄が授業料を法務局に寄託するような事件がおこっており，また金星ハイヤーの社長岩沢靖という理事長の感心できない世評とあいまって，僕らは強い警戒心を持っていました。

詳しい話は，僕が『学園創立40年記念誌』の沿革の第4章に書いた記述を見ていただくことにして，要点はこういうことです。この理事会決議に対する教職員と学生の怒り――狭い校舎の壁は，怒りと抗議の張り紙で覆われました――に直面して，理事長と，この決議を主導した柴野理事が教授会に出席して，我々を説得しようと努めたんですが，我々はこの事態をこう読んでいました。

1．希望学園の岩沢理事長は，札幌短大を吸収合併して手っ取り早く四年制大学をつくろうという意図があり，自分の主力銀行である拓銀の幹部と示し合わせて，短大に不利な状況を意図的につくらせた。

2．他方地崎組は，やはり自分の主力銀行である拓銀幹部と語らって，自分の債権の回収のためにも有利で，また大学のための校地の取得など今後厄介で困難な事業にかかわらないですむこの合併案に賛成し，その状況づくりに加担したこと。

3．拓銀幹部は恐らく実力者の柴野氏にも，この前後になんらかの働きかけをしたであろう。もちろん，拓銀から定年で来た短大の江連定一理事長，井上忠保専務理事などは，拓銀当局には何も言えず，その道具にすぎない。そして我々がなぜ3,000万ぐらい皆さんがつくれないのかと追及すると，柴野さんは，それじゃあ先生たちは，それだけの金を出してくれる経営者を見つけて下さい，そういう人がいたら，われわれもなにも好きで合併したいんじゃない，考え直しましょう，といいました。

よしでは探そうか，と思いましたが，何千万の金を短大のために融通してくれる経営者を，短大の若い教員が探し出すなんてことは，見当もつかない。何時か革命に役立つ人を捜せ，というなら，出来そうですが（笑）」

今西「それは困ったでしょうね。180度反対の商売違いですから（笑）」

中野「それで本当に困っていると，北大文学部のドイツ文学科を出た後輩で，北星男子校に勤めていた友人の坂西八郎さんが，僕の住まいを訊ねてきました。彼は，北大学生細胞に属して活動していたのですが，六全協前後には一時元気をなくし，時々僕の家に遊びに来て，文学の話をしていました。彼は，卒業後就職した旭川南高校（当時私立，後に道立移管）の創設者の松浦政雄校長は，かねがね札幌に大学をつくる夢を持っているから，彼に協力を頼んだらいいよ，と助言に来てくれたんです。それは願ってもない話なんで，早速組合大会に諮って委員長の北村晋助教授と二人で旭川に松浦さんを訪れて協力を依頼したところ，松浦さんは，１億程度の融資を受けることは可能で，それで短大の負債を返したうえ，大学新設のための校地を買うことも出来ると思う，という回答だったんで，飛び上がる思いで帰って，教授会と理事長に報告しました。それで教職員一同は大喜び，合併案を白紙にもどしてこの松浦提案を受けて立つよう，理事会に要求することになりました。でも理事長は案の定乗り気でなく，翌66年１月12日に予定されていた評議員会を開催して合併案をかける姿勢を見せたので，僕はもし評議員会があくまで合併の採決を強行しようという場合は，組合員が全員で会場に入って直接訴えて，合併を阻止するという非常手段を取ることを組合大会に提案して決め，それで当日は全員が緊張して会議室のまわりに待機していたんです。

幸いこれは，前年の春に理事に復帰していた小林さんの事前の工作があって柴野さんが合併即決の方針を変更し，松浦提案を前向きに受け止める姿勢になっていたので，この日の評議員会は教授会代表がさらに松浦さんと交渉をつめるよう委任して，終わりました。小林さんは，自分が創設した文専＝短大が，同業者の岩沢に乗っ取られるのにはもちろん我慢できないので，彼と僕らは緊密な連携を取っていました。それからのことも，いろんな緊張に満ちたエピソードがあるんですが，ともかくその間の苦労がやっと実って，３月の中頃，松浦さんの理事長就任を条件として，北洋相互銀行（当時）から１億円の融資が決まった旨，松浦さんから私に電話があり，皆でこの成功を喜び合いました。これでうちの大学は希望学園に吸収される危機を免れ，自立して短大の校舎を内

装し，さらに四年制大学開設の道を切り開くことができるようになったのです」

今西「奇跡のタイミングで坂西さんという救世主が現れた，という感じですね」

中野「まさにその通りで，もし彼のアドバイスがなかったら，うちの短大の歴史はどうなっていたか，わかりません。もともと坂西君はドイツ語が大好きで得意だったんで，その後短大二部（夜間部）のドイツ語のクラスを担当してもらいましたが，この教歴が生きてやがて室蘭工大のドイツ語の専任になり，その後ドイツに留学して，かねてから重ねていたドイツ民謡学の研究に精進されました。留学中にゲーテの『野ばら』に作曲した歌曲をヨーロッパじゅうからアメリカまで含めて91曲も発掘したことは，日本でも広く知られています（『わらべは見たり「野ばら88曲集」』岩崎美術社，1987年）。

またドイツで広く愛好されているドイツ語俳句の日本での紹介にも力を注いで，これらの業績によって93年にドイツ国から『一等功労十字章』を授与されたんですが，彼の功績はそれだけでなく，ポーランドの歌手で戦時中ナチの強制収容所ザクセンハウゼンに放り込まれたアレクサンドル・クリシェヴィチさんと知り合い，彼が収容所で集めたり，のちに坂西君とアウシュヴィッツ博物館に収められていた被収容者の絵を編集して，日本で出版したこともあります。（『ECCE HOMO。ナチ収容所の画家達とA.クリシェヴィチの証言』坂西八郎・エイジ出版共編，1979年）クリシェヴィチさんは，私がドイツに留学した1980年に，坂西君の紹介でクラクフでお会いし，アウシュヴィッツを案内してもらいました。坂西君もクリシェヴィチさんも故人になられましたが，人との出会いと，それを生かすための自分の姿勢の大事さ，というものを，この歳になってつくづく感じ入っています。反対に，僕らが唖然としたのは拓銀幹部の先のような対応ですが，創立以来の特権銀行としての官僚的傲慢さ，北海道の文化に対するあの理念も知性もない経営路線と，その行く末のあのみじめな破綻とを考えあわせると，この一齣は一種象徴的だ，といえます」

4　札幌商科大学の創設

今西「まったく同感です。ところで中野さんは，最初から札幌商科大学の設立

にかかわられたのですか」

中野「66年の春から，9月末申請をめざすことになりました。教授会から僕を含めて3人の準備委員を選び，新理事長の松浦さん，新専務理事の鎌田さんと打ち合わせながら，進めたんですが，ここでも話は長くなるので，要点にとどめます。

第一の問題は教員組織で，特に商学部の専門科目の専任教員数は，入学定員200名で設置審の審査をパスした者が14名，その半数以上は教授というのが設置基準ですから，小樽商大しか商学部がない本道では，道外に求めるしかない。しかも空前の新設ブームで，東京辺りはほとんど無理。それで僕は，いっそ京都に飛んで，立命館大学に相談したら，と考えて，学術会議で立命館の総長と親しい北大の松浦一さんから紹介状をもらって7月末，同じ準備委員の八木橋君と二人で，気の遠くなるほど蒸し暑い京都に向かいました。その時の総長は――」

今西「末川博さんですね」

中野「そう，その末川博さんのお宅に翌朝電話しますと，末川さんは快く私たちを招いてくれたので，これまでの経過をお話して，先生の立命館のような民主的な大学を北につくりたい，と力説して，ご協力をお願いしたのです。すると末川さんはよく判ってくれて，当時常務理事をされていた小椋広勝さんに電話して，我々に協力するようにいわれ，さらに同志社大の住谷悦治総長にも電話してくれました。その結果，我々30歳台の短大助教授の一週間の京都滞在の間に，小椋さんを含めて4人の教授が，私たちの申請に専門科目の専任教授として協力してくれることになりました。なお不足の一部は道内と東京で確保できました。他方，一般教育の分野では，道内大学の定年退職予定者などから適任の方をお願いしたんですが，この機会に，北大時代から親しくして頂いていたそれぞれの分野での国際的な学者である松浦一さん（生物学）と堀内寿郎さん（化学）にお願いして，快諾を得ました。専門分野の力量に加えて，あのイールズ闘争以来の代表的な進歩的科学者二人を専任のメンバーに加えることが出来た，というのは，大きな喜びでした。若手にも清新な顔ぶれと科目を配置し，

9月末には申請を終了しました。校地の方も，江別市の西野幌（今の文教台）に10万平方メートルの土地が坪2,700円で手に入って，これでなんとか通る，と思ったが，そうでなかった」

中野「12月の審査結果では，教員組織で専門・一般とも1名ずつ不足，という表向きの理由で，『認可保留』になった。担当係官の話と，あとで小林理事が裏から調べたところを合わせると，その一つは，松浦理事長が当時暗躍していた『大学屋』に引っかかって，金であちこちの申請校を渡り歩くグループの一部の名が我々の教員組織に入りこんでいた，ということがあり，我々もそれを事前に排除できなかった，という失点がありました。それに加えて，審査の過程では，明らかに意識的な妨害があった。うちの短大の吸収合併に失敗した希望学園の岩沢氏は，我々の札幌商科大学の申請と並んで，札幌大学の申請を計画しますが，彼は明治大学の出身だったんで，今度は明治と提携して進めようと企てた。それで明大の総長だった佐々木吉郎氏が札幌大学の学長候補になるんですが，驚いたことにこの人は，同時に文部省の大学設置審議会の現会長なんです。つまり審査する組織の長が，審査される大学の学長候補になっている。今ではさすがにこんな不合理は通らないと思いますが，この時代には，堂々とまかり通っていたんですね。我々の申請が保留になった審査結果には，どう見ても意図的に不審な点が多々あります」

今西「札大は明治系ですよね，なんであんなに異常に強いのか，最初はよくわからなかったんですけど」

中野「それで我々の大学申請は一度目は失敗，67年に再度挑戦，となるんですが，出直しの前に，僕は文専の創設者の小林理事から，彼が取ったという審査の裏話を詳しく聞かされました。それによると，小椋さんは学問も人柄も大変立派な人だけれど，いかんせん赤い，また松浦さんと堀内さんも，業績上は全く文句がないけど，どっちも進歩派，赤いとみなされる，そういう人を入れておいたままでは大学はできない，だから申しわけないけど，頭を下げて断ってほしい，と頼まれたんです。僕も怒ってずいぶんやり合ったけれども，このままで出来るという保証もない，それで遂に，再び八木橋君と京都に行き，小椋

さんにお会いしてすべてを話し，お詫びして，了解を得ました。小椋さんは，本当に親身になって協力して頂いたし，人柄も立派で，この旅は，大学設置の仕事のなかで，最も辛い仕事でした。

堀内さんは，申請の翌年春に北大学長に選ばれていたので，候補から自動的に外れましたが，松浦さんに血涙の思いで話しましたら，よくわかった，内で対立していてはなにも出来ない，僕はいいから，いい大学をつくりなさい，といってくれました。申し訳ない，という気持ちがいっぱいで，この前後は，自棄酒を飲んで大分荒れました。今思うと，これもも，イールズとは違うけど，日本の文教機構とその体質に染み付いている一種のレッドパージの産物だった，といえそうです。それを跳ね返せなかった非力は無念でしたが，しかしあの条件下で大学をつくるには，やむを得なかった，と当時も今も考えています。

それで，前年の申請から抜けた方の後を埋め，短大から移行するスタッフの補充を短期間の強行軍で果たして，67年9月末に二度目の申請を出しました。昨年協力頂いた京都の4名の教授の方からは，結局1名だけが残ってくれました。そして今度は，我々の札幌商科大学は，申請12校中4校のみ認可，という厳しい審査を通過して，やっと開設にこぎ着けたわけです。ほとんどすべての仕事は，短大の20数名の若い教職員が，短大の教育活動のかたわら，成し遂げたんですが，これは今でもほとんど考えられない程の大仕事でした」

今西「大変なお仕事でしたね。ところで札商大の初代学長は小樽商大の室谷賢治郎さんですね。お聞きしていても，そちらの大学と小樽商大との間の人の縁は，ずいぶんと深いものがありますね」

中野「そうですね。室谷さんは合併問題が起こる65年春の短大学長選挙で，鈴木亮さんが，室谷さんは大正期にドイツ経営学を日本に紹介した人だから，商大の設立に役に立つ，と云って推薦して決まったんです。確かに色々と貢献して頂きましたが，合併を阻止することとか，教員を集めるなどの仕事はほとんどしない，ただシャッポとして乗っかっているだけでした。なにしろ全国の城を見るのが一番の夢だ，という方でしたから，人集めで一緒に京都に行った人も，ずいぶん苦労したそうです。でも第3代学長の石河英夫さんには，第二次

申請の時をはじめ，たいへん奮闘して頂きました」

今西「マア，国立大学の先生は『働かない』ことが美徳ですから…。泰平の時代はそれでもいいのですが，今のような乱世では大変です」

5　4・17ストと中国路線

今西「それで札幌商科大学は先生たちの努力でめでたく開学ですが，68年前後の私学の急増はすごかったし，あれはちょうど我々の世代で，それが大学の矛盾をいっぱいつくって，結局大学闘争ってそれが原因ですからね」

中野「そうですね」

今西「学生が授業に行っても教室に入れないくらい人があふれている」

中野「それと，国際的にはね，パリのカルチェ・ラタンに始まる学生反乱の世界的な広がり，影響がある」

今西「また中国の文化大革命があり，世界的にもスチューデント・パワーが台頭し，アメリカもベトナム反戦運動をやっている時期ですから。文革なんかは先生，どういう風にみられていたんですか」

中野「文革といっても，自主的な知識人や学者，作家などを弾圧したり，紅衛兵を使って毛沢東派べったりでないと見られた政治家などに暴力を振るうような運動は，もちろん異常だし，批判的以上に否定的に見ていましたが，しかし世界的にああいう反乱が起こるのは，そういう要因が渦巻いているんだということも見なければならない，そういう意味では文革のスローガンになった毛沢東の『造反有理』って言葉は，我々のように小さな私立大学で苦労している人間の胸には反面，どこかで共感する響きもあって，最初はある種の矛盾した気持ちになりましたね」

今西「その前に部分核停条約があって，共産党の中で部分核停条約賛成派が除名されて，『日本のこえ』が形成されるんですよね。その分裂があって，68年に今度は，中国派の分裂があるわけですが，その辺の動きはどういう風に考えますか」

中野「私が就職した63年の春闘だったが，国労がストを構えた時，共産党の指

導部がこれをやみくもに非難しますね，『挑発スト』，とかいって」

今西「1964年の4・17ストですね」

中野「そうでしたね，この頃北大に行って，昔の学生細胞の諸君にたまたま会った時，これをどう思うかと聞かれて，国鉄労働者が，30年も働いて2万5千円ぐらいしかもらえないのに抗議して，ストを構えるのを労動者に対する挑発だなどと決めつけるなんぞ，とんでもない間違いだ，これは中国派の連中の指導に違いない，と答えました」

今西「毛沢東の指導があったと言われてますね」

中野「しばらくしてから，あれは間違っていた，と珍しく認めましたが，日本の共産党は，49年など労働運動の重要な局面でほとんど間違えていた，といってよいくらいです。この方針のため，沢山の国労内の党員が大きな被害を受けた。当時親しくしていた塩田庄兵衛さんに手紙を書いて，真剣に反対して欲しい，と訴えました。その当時の共産党幹部の誰だったか忘れましたが，このストについて『賃金の後追いする卑しい思想』なんて云った人がいて，依然として彼等が先進国の労働運動を理解する最低のセンスすら欠けているのに，唖然とした記憶があります。おっしゃる通り8回大会から10回大会あたりまでのこの党の指導部はソ連共産党との亀裂のために全体として中共路線崇拝が濃厚で，当時の『赤旗』には林彪の『人民戦争の勝利万歳』など中共の長大な論文が次々と全文掲載されて，まるで中国共産党の機関紙のようだった」

今西「北海道は，ソ連派，中国派っていえば，中国派の方が多かったですか」

中野「うーん，どっちかっていえばそうでないかなあ，でも何しろ4・17スト問題の時も，トップの宮顕が，病気療養でわざわざ中国に行ってお世話になっていたんだから，その中央にいつもおとなしくついていくのが道委員会でね，だから当時我々の細胞の会議に時々出席していた常任委員の内山さんは，いつも中国服を着ていて，中国の党の路線を代弁していましたが，喧嘩はあまりしなかったけれど，まあほんとうに中国の幹部そっくりでした（笑）。でも中国の党との関係が変わってくると，今度は中国側の批判を始めた（笑）」

中野「この頃はもう中ソ論争は公然化してたんですが，僕はどちら側にも多く

の批判点がありました。でも，毛沢東が世界戦争になって核兵器で沢山人民が死んでも人民は滅びないが，帝国主義は滅びるから恐れない，なんていうとんでもない発言や，フルシチョフの平和共存路線とスターリン批判の意義を頭から否定する対応からして，おおまかにはソ連路線の発展的改革しかない，と考えていました。革命の方式では，７回大会当時から，イタリアの構造改革路線に共感して，民主主義を徹底しつつ行われる新しい社会主義革命でしかない，という考えでした。また『民族の解放』は革命でなく，それ以前に民主主義的変革の一部として実現さるべき課題である，という点からも，二段階革命ではありえない。こういう考えだったんで，70年の第11回大会で不十分ながら現れた先進国革命の方針には，今度こそ，というやや過大な期待を寄せたんです。でも不破新書記局長が，本来自由と民主主義を基本とする先進国革命路線を，いつもそれと矛盾するところ多大な綱領の言葉で正当化しようとするんで，これも宮仕えしている以上ある程度は仕方ないか，思っていましたが，やはりどこか信頼がおけなかった。でも70年代は僕としては，共産党とその周辺のジャーナリズムで，一番よく発言した時期でした」

今西「不破さんの宮仕えとは，より正確にいうと，宮顕仕えですね（笑）。ただ両者の間には，対立や矛盾があったようですが。」

6　『明和方式』の成立

中野「ところでやっと一年遅れで開学した札幌商大ですが，1968年は，ちょうど開道百周年にあたり，僕らはこの新生の大学を本当の意味での道民のための『道民の大学』として位置づけ，専門科目の充実とならんで一般教育と外国語科目の重視をうたい，３～４年も一つの外国語を必修とする４年間語学一貫教育の実施など，高い理想を掲げて出発しました。コンピューターの早期導入と情報教育の開始も，他の私大にさきがけて私が書いた設立趣意書で謳いました，書くだけではお金も要らないんで（笑）。初期の学生にはまた個性豊かな学生もたくさんいて，半年後には自治会も生まれました。ただ，短大は札幌市内にあり，商大は江別市に出来たんで，合同の教授会や組合大会を開く時とか，そ

れに大抵の教員は両方の大学に授業があるため，双方に行き来しなければならないのが，たいへんでしたが。でもそのうちに，最初の試練として，大学の財政危機がやってきたんです。開学が一年遅れたため，収入がそれだけ遅れたのに，校舎の建設など借り入れの必要は容赦なくかかってくるが，新しく主力銀行になった北洋相互銀行も，工事をする建築業者も，この学校は危ない，と思っているからおいそれと返済を待ってはくれない。後で判ったんですが，68年度末の消費支出総額に対する金利の比率は，実に20%にもなって，全国私大平均の5%の4倍だったんです。高度成長期の金利はゼロ金利に近い今から見ると，異常でした。それで松浦理事長は旭川の高校長と，こちらの商大と短大（明和学園）とを掛け持ちする苦労に耐えかねて68年の末に理事長を辞任したのですが，柴野さんが仕掛けたこの理事会では，狸小路の老舗の竹内呉服店の竹内恒宏社長が新理事長に，柴野さんと三井武光元道教育委員長が，副理事長になりました。それで組合は来年度の給与のベース・アップを理事会に迫っていたのですが，新三役は，こういう財務状態ですから，うんといわない。必要な教職員の採用についても，首を縦に振らない。

この年はまた，世界的な学生反乱が始まった年で，日本でも東大と日大でバリケード封鎖をともなう強烈な大学紛争の年だったことは，ご承知の通りです。そのうちに69年の正月が来て，東大闘争はあの安田講堂攻防戦になりましたが，こうした大学紛争の息吹きは，ジャーナリズムを通じて，商大の一年生にも次第に伝わってきました。これはレッキとした武器を使っての暴力と暴力の攻防で，海外の大学紛争では見られない。大学内の闘争が，こうまでになるとは，これまでの自分の大学生活では全く考えられなかった事件で，ちょっと大げさかもしれないが，ひとつの文明史的な衝撃でした。

こういう時代に，こんな財務状態の大学の経営を新理事会は本当に引き受けるのだろうか，と我々は皆たいへん不安でした。でもここまで来たら，やってもらうしかない。それで僕が提案して，新理事長と新副理事長の歓迎会を商短大合同の教授会で開いて，そこでひとりひとりが学園に対する抱負を語り，新三役への期待と希望を熱く述べました。これは，理事長，両副理事長を感動さ

せ，後の柴野提案につながった，とは，柴野さんがのちに語ったところです。3月になって，柴野副理事長は商大と短大の合同教授会に出席して，今後本学園の経営は，先生方にやってもらいたい，という爆弾提案を，理事長，両副理事長の協議の結果として提出しました。その主旨は，

1．現在の私大紛争の根源は，教職員と学生の意志を無視して理事者が経営を独占している古い体質にある。本来私立大学は，理事者の私有物でなく，強いていえば教職員と学生のもの，といってよい。

2．それで今後は，これまでのように教職員が理事者に要求を出すのではなく，経営は先生方にお任せしたい。理事会は教職員が選んだ理事を受け入れ，その数は制限しない。その上で，ガラス張りの運営を学生と協力して実行してほしい。

3．教職員以外の理事は，いわば学園の後援会となって，理事が決めたことを納得できたら，先生方には出来ない仕事，例えば資金の調達や負債の保証などを実行するものとする。

そのうえで柴野さんは，あなた方先生たちは商大をつくったのだから，経営が出来ないはずはない，そしてこの提案が受け入れられなければ，私たちは遺憾ながら退任せざるを得ない，といったのです。この柴野提案を，我々は一週間の論議の末，全員一致で承認しました。教員が片手間に経営なんて出来るはずはない，という意見もあったし，またこの提案をのまなきゃ理事長たちは辞める，というんだからやむを得ない，という受け身の姿勢もありましたが，ここまで来た以上，やれるだけやるしかない，やろう，という張りつめた前向きな構えが大部分だった，と思います。

この中で明和学園細胞は，大学新設とその後の活動を通じて二桁以上にメンバーを拡大していましたが，当面の情勢を分析して，教職員による学園経営は大変な負担だけれども，でもそれを通じてこそ初めて学園の徹底した民主化と，それにもとづいての経営の危機の突破も，教学の改革も可能となりうる，と考えると，この提案は積極的に受け入れよう，と皆に呼びかけることで一致しました。また理事会の過半数は，教職員が選出した理事が占める，さらに学園の

重要事項（予算，人事枠，将来計画の大綱など）は，教職員全員が学長も用務員もその限り全く平等の権利で参加する『全学教職員大会』での審議を経て決定するなど，その後当時の我々の学園の名称から，『明和方式』とか『明和体制』と呼ばれて，現代用語辞典に新語として記録される程知られていった運営方式は，我々細胞で審議し，その後の全学の議論で一致して確認されたものです。この結果，例えば職員も『事務局会議』という審議機関を持ち，そこで一定の人事権を理事会から委任されたり，全学の運営に提言したりすることが出来ました。また職員の理事も職階と関係なく選べるんで，事務長が理事でないのに若い職員が理事になる，ということも当然起こりました。」

今西「面白いですね。これなど，ソヴィエト方式とも似ていますね」

中野「そうですね。最初の頃のソヴィエトというか，僕はむしろマルクスの『コミューン』方式を思い浮かべていたんですが，とにかく全員が大学をどうするか，どうしたらよくなるかを，この当時は真剣に考えていました。これは，ひとつの革命でした。この体制が必然となった根拠は，なによりも学園が存亡の危機にあった，という事情でした。そして本学ではこの危機を担い，解決しうる主体は，ここから逃げ出すことができない人間たち，つまり第一には我々教職員であり，この教職員が危機にある経営を責任をもって動かす権利を握る必要がありました。その次の条件としては，全学の教職員がそのための方策に積極的に合意でき，さらに自分たちが合意した目的と方針に責任を持ち，その実現に献身できなければならない。それで当時はまだ全部で教職員が70名弱だった，という規模の問題も，実はこの体制が生きて活動できるための不可欠の条件だったんです」

今西「それに，柴野さんがいうように，大学をつくる力量がある教員たちがいたということも，大事な条件ですね。それにしても，この柴野安三郎さんという人はたいへんな人物で，もし彼がいなければ，こういう提案もなかったわけで，先生たちの大学もどうなったか判らなかったわけですよね」

中野「その通りなんです。柴野さんは，私がこの世で私が会った人のなかでもっとも感服し，また教えられた人のひとりです。彼は新潟の柏崎近くの荒浜村に

生まれ，高等小学校を出てすぐ鉄工所に就職して腕を磨き，戦艦長門の乗組員になってそこでも技能優秀で艦長に表彰されたそうですが，除隊後1931年に小樽に来てタクシー会社を創設し，48年には全道一の北海道交通株式会社の社長に就任して，本道を代表するハイヤー業界のリーダーになります。

この人の特徴は，何事にでもすばらしい創意を発揮して時代をリードするたぐい稀な素質を持っていることで，戦後のガソリンがなかった時代に，木炭ストーブで車を走らせたり，全国に先駆けてタクシー無線を導入したりしたことは広く伝えられていますが，もうひとつ柴野さんの偉いところは，貧乏だった時の苦労を忘れず，労働する人びととの暖かい人間的な連帯を常に心がけていた，というところにあります。それで小樽時代には労働運動に参加して拘留された経験もあるようですが，北交ハイヤーの社長になって間もなく従業員持ち株制度を導入したのも，その現われでしょう。

柴野さんのこういう発想が決して単なる新しがりでなく，彼のしっかりとした理念と哲学に支えられていたことは，大学紛争に直面してすぐあの柴野提案を思いついたところに現れていますが，私は彼がこの前後に，自分は酪農学園の創設者だった黒沢酉蔵さんの教えに深く帰依したことがある，と印象深く語ったことを思い出します。日本と北海道の酪農業の偉大なパイオニアだった黒沢さんも，貧しい農家の出で，足尾鉱毒事件の田中正造の天皇直訴事件に感動して田中の元に走り，半年投獄されますが，その後北海道に渡って牧場で働き，酪農家として自立するかたわら受洗してキリスト教徒になります。この彼が掲げた理念が，彼が創設した酪農義塾を経て今の酪農学園の建学の精神となった神・人・土を愛する『三愛精神』であり，健康な国土によってこそ健康な国民が保たれる，と説き，化学肥料や農薬偏重を排する『健土健民』でした。終戦直後にはデンマークの酪農業を支えた協同組合主義の実現をめざして『日本協同党』を結成しますが，公職追放で政治活動からは引退する。

この二人のパイオニアの生き方と思想には，おおきな共通点があり，できたら書いてまとめてみたい，と思っています。柴野さんはまた，ハイヤー業界の第一線を退いたあとで取り組んだ日ソ友好運動では，二度のソ連訪問でソ連の

高官たちを心服させて日ソ貿易の本道の足場(『北海道日ソ貿易協会』)をつくったり，私財を投じて平岸に『日ソ友好文化会館』を建設して，ロシア語教育や文化交流の拠点にしたりして，1981年には，日本人で3人目になる『ソヴィエト連邦民族友好勲章』を受章しました。僕は柴野さんに誘われて，72年に柴野さんが団長だった本道の経済人の代表団の一人になって，ソ連を訪問しましたが，そしてこれは僕の最初の海外旅行でしたが，ここでも柴野さんの，人間を深く早く洞察し，そして自分の側に惹き付けるたいへんな直感力と弁舌力，そのための準備の周到さには感動しました。僕は82年頃うちの理事会に，柴野さんの伝記を学園でまとめようと提案して承認され，柴野さんの生まれ故郷まで行って，取材したんですが，書くところまでいけなくて，その内に柴野さんが亡くなって，たいへん申し訳なく思っています」

今西「先生の柴野伝は，是非書いてほしいですね。それでその明和体制はその後どう進んだか，ですが」

中野「脇道じゃないけど，大分周りの話になったんで，本道に戻って要約して話します。まず教職員が経営の主体となったので，教員と職員別に2，3年の任期で理事14～5名を選出しますが，とりわけ教員常務理事（3～4名）は，講義の他は常務理事室に出勤して職員常務を交えて経営上の全問題を処理し，また解決すべき方策を考えて理事長，専務理事（初代は柴野さんが選んだ元道教育長二本木実氏)，事務局長と協議してその実現にあたる，という激務が待っていました。

僕を含む常務で最初にやった仕事は，大学新設の際の公約だった対公務員3割増の教員（のみ）の給与体系を廃止して職員給与との原理上の格差をなくしたこと，そのかわり教員と職員共に公務員給与の等級別格差を排除して，若手の給与を引き上げる新給与体系に変更したこと，でした。これは人件費総額の伸びを押さえるためだけでなく，教職員の団結のためにも不可欠でした。

厳しかったのは，理事長が我々に，『自分が頑張る気持ちになれるために，皆さんは一年間ベースアップは我慢してほしい』と云われた時で，なんとか少しでもと，ずいぶんと話合いましたが，最後はこのことを我々が組合大会で皆

に申し入れ，承認してもらいました。当時の物価上昇はひどく，若い組合員が組合大会で泣き出す場面もあり，辛い決定でした。法律上ではおかしいようですが，その当時は我々理事も組合員の一員として大会に出席して発言していました。我々は，いわば組合の経営担当執行部だったんで，またそれが当時の本学にぴったりで，労働法上どうだなんてことは，こういうときにはどうでもよい。それで当時は我々常務理事も以前と同じくメーデーに参加して，シュプレッヒコールでは『大幅賃上げを勝ち取ろう』なんてスローガンを一緒に叫んでいたんです，少々具合は悪かったけれど（笑）。

人件費や物件費の少しの無駄も省くよう，予算編成では大分乱暴に削りましたが，不服の筋には『査定は否定である』といって煙に巻いてから，自分でも可笑しくなったものです――スピノザの『規定は否定である』を思い出して（笑）。しかしそれでも最小限の建築はせねばならないのですが，その資金の調達は，一つは学園債を引き受けてもらう道で，その総額は69年度末で4,653万円に達しました。その内竹内・柴野・松浦三理事の関係者分は3,721万円，父兄735万円，教職員197万円で，これは我々教職員の努力が，学外理事の信頼と協力を確実に獲得しつつあったことの，成果だったといえます。

もうひとつは建設資金の大部を私学振興財団から引き出す道ですが，70年の夏，本学園への貸し付け限度額を超えたのでこれ以上貸し付けは不可能，と財団が通告して来たとき，理事長はじめ我々理事は財団に赴いて必死に折衝しました。その際我々教員が理事として衷情を披瀝したこと，さらに組合委員長も同行して訴えたことは，財団幹部に強い感銘を与え，遂に財団の旧規定を特別に適用して6,700万円の既往債務弁済金の貸し付けが認められ，学園は絶体絶命と見えた窮境を脱することが出来ました。でもただ削るだけでは，教職員が経営の創造的主体であるメリットが出て来ない。

ひとつは時代の要請を先取りしてのコンピューターの導入による情報教育の展開で，70年に大議論の末富士通の新型電算機の購入を決定してその研究助成を文部省に申請し，これも八方努力の末，購入額に近い助成を得て71年から電算機センターの開所式を挙行しました。またこんななかで多忙に明け暮れる教

員の研究のために，69年から年間4名，半年間の国内研修を保障すること，さらに74年からは1名一年間の国外研修制度を開始することにしましたが，この海外研修制度は後に学部増設に伴いほぼ一学部に毎年一人まで数を増やし，また研修終了者にも2回目（半年）のチャンスを保障するところまで拡大されました。これはまさに，他大学の教員を羨望させるに足るもの，となりました。また職員を含めて有給休暇以外の夏休みの『ヨーロッパのVACANCE並みの』長さは，ベ・アも満足に出来ないのだから，せめて夏休みぐらいはゆっくり取ろう，と常務理事会が組合に提案して69年から始まったもので，長く他の私学の組合が追求するモデルになったようです。こうして，初期の苦闘は続きましたが，一年ごとに学生が増えて学費収入も増え，教職員も学外の理事も，ようやくこの体制に自信と余裕を持てるようになりました」

7　学園闘争以降

今西「明和方式が実行される69年からは全国の大学でバリケード封鎖が広がりますが，北大でも『五派連合』の学生が大学本部や学部の校舎を封鎖したり，堀内学長を軟禁したり，それに反対する学生と組合が封鎖を排除したりする紛争が翌年まで続きますね。その当時，先生の商科大の方では大きな紛争とか事件はなかったですか」

中野「商大が始まると，一学年380人の学生と教職員とはだいたい皆顔なじみの家庭的な雰囲気で，学生たちは北大で確か最初の女性ドクターになった鮫島和子助教授の指導で，野幌の原野の校地をローンや中庭に変える奉仕活動に参加してくれました。明和体制になってからは，学費値上げから環境整備，教学改革から学生処分など学生にかかわる問題はすべて，学生自治会と教授会，事務局の会議の三者による協議が商大と短大で行われるようになり，それが学園の伝統になりました。

でも学園紛争の影響は69年から70年にかけてうちの学生や教員にも影響を及ぼして来て，北大のバリスト下の建物の一室は，札商大の部屋になっている，といううわさもあり，気にかけていたんですが，70年の6月の16日の朝，八木

橋君から電話があって，商大の一号館が学生によってバリケード封鎖された，と知らされたんです。その前日まで僕は，同じく商大の専任になった高岡さんといっしょに，二人で書いた清水書院の『人と思想シリーズ』の『レーニン』の最終校正のために長野に行っていたんですが，帰ってその翌朝でした。1970年はちょうどレーニン生誕百年で，この本の企画が生まれたらしい。登校したら，封鎖されない二号館の教室に教職員と登校した学生が集まっていて，全学集会が始まるところでしたが，そこで僕は，封鎖学生の代表の出席を求めてから，我々の問題解決の基本原則として，次の三点の提案を行いました。

1．問題は民主的討議によって解決し，バリストの物理的解除を含めて，一切の暴力行使を排する。

2．その前提として，問題解決の主体は商大の学生と教職員とし，いかなる外部の介入をも認めない（いわゆる『外人部隊』や警察権力などを介入させない）。

3．討論中も，安保条約についての共同の研究と検討を行う。

この提案は，封鎖学生の代表を含めて参加者全員の賛成を得たので，僕は安心しました。民主的討議が暴力で排除されない限り，封鎖が永続できるはずはないから，です。討論は，安保条約と，この条約に反対するためという理由で行われた封鎖の是非をめぐって，3日に渡って続きましたが，討論してみると，僕も一人の報告者になったんですが，安保に反対と云いながら，バリストの諸君も，安保についてほとんど何も知らないんですね。60年の時もそうでしたが，それよりもずっと。封鎖の『理由』は，本当のところ，どうでもいいらしい」

今西「70年安保のことを，ちゃんと知ってたわけじゃないですからね」

中野「三日目の18日でしたか，その夕方に右翼の暴力団らしい者から封鎖されている一号館に電話が入り，これからそっちに行くぞと云った，という知らせが封鎖学生から討論中の我々に入り，どうするか，が問題になったので僕はとっさに，暴力による介入に対しては我々が共同で対処するため，ここの全員が一号館に移って討論を続けよう，と提案したところ，皆が賛成し，全学集会はすぐ一号館に移って続けられました。この時点で，封鎖は実質的に解除されたわ

けです。

結局暴力団は来ませんでしたが，封鎖学生全員を含めての討議では，安保に反対するという封鎖はいったい，誰に向けられるのか，それは教職員や一般学生に向けられるべきでなく，本来は安保を強行する勢力を包囲するのが本当の闘いでないか，という点が焦点になり，最後に封鎖学生の代表が明日朝までに封鎖を自分たちで解除すると表明して皆がそれを承認し，さらに安保問題は大学立法などとの闘争を含めて今後も全学で取り組んでいくことも確認して，夜半に商大の全学集会は終わりました。ですから，本学では紛争期を通じてガラス一枚割れないし，誰１人怪我もなかった。本学では70年もそれ以後も，こういう問題で暴力は一切振るわれたことはありません」

今西「よかったですね，ほんとに。あの頃は，さらに犠牲者が出てますからね」

中野「これはうちの大学が小さくて，考えが違っていてもまだお互いに家族的で，外に対しては誰かが『商大ナショナリズム』と呼んだほど，どこかまとまっていたことがありますね。そして明和体制はこのまとまりを固める大きな要素だった，と思います。またこれは高岡さんが語った言葉でそうだと思いましたが，商大が都市のまん中でなくて，まだ周りに自然が息づいている野幌の原野にあったことも，とげとげしい対立を生まない大事な条件だったんじゃないかなあ，と」

今西「北大は激しかったでしょう，北大の前に市電が走っていて，その路面の石を取って，投げ合いになったり，すごかったですから」

中野「前に法文経の学部が入っていた本部の建物が占拠されて，警官隊が解除しようとした時，その後ろの昔旧制予科の教室だった木造の建物が火炎瓶で燃え上がってね，ひどい荒れかたでした。この間の集会（2010年５月に北大で開催したイールズ闘争60周年の北大記念集会）には，全共闘系のバリストのグループと対決した当時の教職員や学生がいっぱいいて，70年前後の記憶とは，その鮮烈な体験がすべてだったんだなあ，と改めて思いました」

今西「流血事件がたくさん起こりましたからね。私の後輩にも，その時に怪我をして，未だに身体障害者で，車椅子生活を送っている人がいますからね」

（この時東日本大震災の地震が札幌に伝わる。14時46分）

中野「明和体制下のその後ですが，その最大の事業は，同じ学園で札幌市内の短大と江別市の商大の二つに分かれている大学を，商大校地に統合して，商大を複数の学部を持つ総合大学へ発展させるという，第一次の将来計画を立て，実行することでした。伝統ある短大を札幌市内に持っていることは，夜間部生を集めやすいなどもろもろのメリットがありましたが，二つに分かれている不便も大きく，それに70年代に入ってからは，学生の半数以上を占めていた夜間部の入学生が急に減り，また昼間部の商業科の入学生の大部分は，女子学生に変わってきていました。短大は，全国的にも女子教育の場となってきたのです。一方では，商大をいつまでも商学科一つの単科大学にしておいては，教育上も発展性がないし，設備面でももったいない。例えば独立した図書館は，商大でも建設が迫られていたが，平行しての短大での建設は，財務上も校地の狭さからも無理でした。それで常務理事会は，72年の３月，はじめての学園将来構想の策定という課題を提起し，73年には理事会・教授会・事務局会議から選出された将来構想検討委員会を組織して，ほぼ一年間，教職員から両大学の学生と同窓会にまでその全学的な検討を求めました。〈検討委員会〉がまとめた案は，

１．短大の商業科は商大の商学部に統合し，後者はやがて商学部と経済学部の二学部に発展させる。

２．短大夜間部の商業科は，商大に開設する商学部第二部に継承するものとする。

３．両大学を通じて比較的豊かな一般教育と英文科のスタッフとを活用し補充して，人文系の新しい総合学科と英文科から成る人文学部を開設する。

４．商大に開設される短期大学部は，時代の要請にふさわしい学科から構成されるものとし，幼児教育科と音楽科の二学科とする，といった内容で，74年７月の全学教職員会議に提案されました」

中野「なにしろ全部で一学部４学科という現状から，一挙に五学部７学科にする，というんで，提案された教職員も理事も一様にびっくり，これが本当にできる？といった半信半疑が最初の反応でしたが，だんだんと自分たちでも出来

るはず，といった自信に変わっていきました。それでも短大の発展的解消に対しては，短大学生たち，特に夜間部生の疑問（通学上の困難など）や反発もあり，僕ら理事と短大教職員が何ヶ月もかけて話し合い，通学バスの運行を含めて，合意に達したのでした。

新しい人文学部構想，特に人文系の新学科については，最初はとりあえず『社会学科』としていましたが，僕としてはなんとかして人間を総合的に研究する広く豊かな知見を開発し，あわせてヒューマンな感性を養う学科にしたい，という強い欲求がありまして，皆で検討の結果，結局『思想文化と人間』，『社会生活と人間』，『人間の形成と発達』の3コースを持つ『人間科学科』に落ち着きました。これは，ひとつにはあの大学紛争から得た教訓を踏まえての，発想であったつもりです。

またこの学部には，専門学部であるとともに，全学の一般教育の主担当学部でもある，といった位置づけが与えられました。短期大学部の二学科は，短大の伝統を新しい器に盛ろうという気持ちから，出来たらそれもやがて4年制の学部に格上げする，という野心をもって提案したのですが，賛成の声もありましたが，あまりに飛躍すぎる，という反応が強く，それで結局その部分は『保留』となりました。

実は本学が芸術系の学科を考えているらしい，ということを聞き知った当時の大谷短大の先生たちが我々の所に来て，是非貴学でつくってほしい，その場合は私たちは皆こちらに移ってくる，大谷は校地の狭さで4年制は出来ないから，と申し入れて来たんです。美術と音楽の学部が我々の手で出来たら，という美しい夢に，ひとときは酔いました。今でも，残念した，という思いはかすかに残っています。

それとは別に，札短大は商大に統合しても，札幌市内で社会人を教えることのできる現在の短大校舎は将来社会人教育の場として必ず必要になるから，なんとか短大の校地校舎は売らないで持ちこたえられないものかと，常務としてずいぶん考えたんですが，その売却代金分3億5千万円は自己資産としてどうしても不可欠，という申請上の財務的条件があって，遂に手放さざるを得ず，

小林さんの協力で道の商工会議所に買ってもらったのですが，今の学院大の狭い社会連携センターに入るたびに，残念さがこみあげてきます。

結局この将来計画案は，75年に申請され，2年間の努力の甲斐あってすべて認可され，77年度から実施されました。ただ経済学部だけはさしあたり商学部内の経済学科として生まれ，後に学部になります。全国で4番目の人間科学科は，イメージだけでつくった僕たちもどう魂をいれるか，わいわいと議論しながらの出発でしたが，全国から一番学生が集まり，本学の入試を引っ張る人気学科になりました。こうして札幌商大は，我々が『新体制』と呼んだ『明和方式』のお蔭で，どうにか最大の危機を脱出でき，そのうえ文科系総合大学への道を歩み始めることが出来た次第です」

今西「一番忙しかったのは先生がやった教員の常務理事だろうと思いますが，今になってみるとその体験はどうですか」

中野「普通の教員生活からみればたしかに殺人的な多忙でしたが，いまお話しした時期はまだ40歳台で，身体も頑健だったので，なんとかやれました。他の常務諸君は，大体2年か3年で交替しましたが，僕は理事長と柴野さんから『貴方は辞めないで下さいよ』って最初から云われていたのと，また開設以来の仕事の一貫性と責任の関係から，僕は辞めることが出来ず，この将来構想の実現までまず10年間常務をやりました。たいへんはたいへんでしたが，危機の時期の学園経営の経験は，自分自身にとっては何物にも替えられない，生きた総合科学的な体験でした。いつ，どんな構想を提起すべきかは，研究のあとは全くの直感と最後は信念による決定で，経営学や経済学を多少勉強したかどうかなどとは，ほとんど関係がない，いや社会科学を公式的に学ぶと，大抵は情勢を決定論的に見る習慣になって，消極論に陥り，結局情勢を創造する発想や決断は生まれない。マル経学者も，大抵はそうでした。いや，マル経学者は概して『資本論』の壮大な理論的伽藍の内に閉じこもって，外の現実をとうえ，変革する姿勢や能力は低い。

なお我々の学園常務理事としての活動は，あくまでも教育・研究労働者でありながらの活動，専門的経営者ではない一種の労働者自主管理としての活動な

ので，その仕事をどう評価すべきか，したがって例えばその活動の報酬をどのように決めるか，もひとつの問題でしたが，広義の研究教育活動の一環として捉えて，2コマのノルマ超過分（最初の3．4年程は月6千円）を常務手当としました。しかし，これではあまりに仕事量と不釣り合いになるので，後には定額の手当として支給することにしましたが，実額は以前とそう変わりないものでした」

今西「最初の将来計画が完成した頃には，大学の共産党の支部の活動はどんなでしたか」

中野「商大開設時から数年は，短大と商大の二つの教員班，合わせて10数名と職員班数名の三班と，委員会（いわゆるLC＝細胞指導部）の構成で，各班から1，2名程選出される委員会では，明和体制下の学園の支部ですから，当然その危機を打開し，発展をめざす基本方針が討議され，理事会，教授会，事務局会議，組合などに提起し決定する政策のたたき台になりました。

僕はこの10年間，やはり一貫して支部長（CAP）をやりましたが，これは，学園の方針と支部の方針とをしっかり結合させるために，この時期には絶対に不可欠でした。僕は党員であることを隠さなかったし，竹内理事長も柴野さんも小林さんもそのことをよく承知の上，信頼してくれていました。

そして僕が支部活動で第一に重視したことは，党員は学園の一番苦しい，困難な仕事を真っ先に担い，まさにその『前衛』的な仕事ぶりで教職員と理事，学生の信頼を集める事の大切さで，もう一つは，あくまでも自由な学習で世界と日本の情勢を先見的に掴み，方針作成に反映させる力量を育てること，でした。党の決定をも批判的に検討して，自主的な判断を持ちうること，しかし実践においては決定にきちんと統一すること，それから人事その他で，党の狭いセクト主義に絶対に陥らず，公正の原則をどこでも貫くこと，でした。

最後の点は，党が学園での大きな『政治勢力』になるほど特に大切なところで，教員人事はもちろん職員人事も公募による選考を採用しましたが，本学がマルクス主義の研究者などを排除しないことが，『明和方式』とともにいろいろのルートから次第に伝わっていくと，院生の応募などにも一部その影響が現

れてきました。

若い経営学の院生が採用されて党員であることが判り，班に所属しましたが，その後彼が紀要に書いた論文の一部が共産党の雑誌『経済』の論文からの丸写しであること，しかもそのような盗用が二度もあったことを僕が発見して，彼を自発的に辞職させた（盗用の事実は公開せず，自己都合にさせましたが）こともありました。しかし大体のところ，本学園の党員は，学園とその教育研究の発展のために，非党員の教職員の皆さんとしっかり団結してよく頑張っていた，と思います。」

（付記　このインタビューは，2011年３月11日，札幌市内の中野徹三氏宅で行った。当日は北大スラブ研究センター研究員の井澗裕氏，北海道情報大学の天野尚樹氏も同席した。井澗恵理氏が原稿を起こし，中野氏が大幅に加筆したものである。）

本誌第62巻第１号「北大・1950年代の政治と学問」正誤表

４頁10行目　Comminform → Cominform

８頁24行目　フルシチョク→フルシチョフ

９頁15～16行目　赤平で住居不法侵入の逮捕状が出て→抹消

28頁27行目　イールズ事件→白鳥事件